

# A Study on Causative verb *HAVE* and Its Application to TESOL/TEFL

藤原隆史

本論文は、英語の使役動詞 *have* について考察を行い、その知見を英語教育に応用する。使役動詞 *have* は、学校文法に於いて、他の使役動詞 *make*, *let* と共に同一項目で扱われ、*make* は「強制」、*let* は「容認」、*have* は「使役・許容・受け身・保持」の意味を持つと説明されることが多い。(安藤 2005) しかしながら、当該使役動詞は、(i) *make* だけが非人称主語を許容し、また、*have* 文だけが、(ii-a)「目的語+原形不定詞」という形式に加え、さらに、「目的語+現在分詞・過去分詞」という言語形式も許容し、(ii-b) 受け身の意味をもつという大きな差異があるにも関わらず、これらの差異は、ほとんど教えられないことはない。よって、使役動詞の学習に於いて、3つの使役動詞はほぼ同一と教えられるものの、言語形式が実は一様ではなく、また、その意味解釈も多様であることから学習者が混乱をきたすことがある。

*Have* 使役文の先行研究は、大きく分けて2つのカテゴリーに分類することができ、その片方がさらに3つのサブカテゴリーに分かれていると考えられる。すなわち、①素性を用いた説明と、②意味論的観点からの説明である。②は、②-1 意味用法を列挙したもの、②-2 *Have* 文に最小限の意味解釈を認めるもの、②-3 単義と意味誘導条件に基づいて説明したもの、の3つに細分化される。しかしながら、これらの先行研究のどれもが、当該使役動詞がもつ上の2点の差異について十分な説明を行っているとはいえない。すなわち、(i)なぜ *make* だけが無生物主語を許容するのか、(ii)*have* 使役文が(a)様々な言語形式を許容し(b)意味解釈が多様であるのはなぜか、という2点である。

本論文では、上記の先行研究が課題としている上記2点について考察を行い、当該三使役動詞の差異についての考察を行った。本論文は、3つの論理的枠組み、すなわち、①認知不協和理論、②語彙概念構造(LCS)、③概念化者を用いることで、上記(i)及び(ii)の問題を説明した。英語の使役動詞に於いて、*make* と *let* が LCS で表された語彙概念構造に於ける「原因」に焦点を当て、尚且つ概念化者が「主語」を事象の原因と解釈すれば *make* を、「目的語」を事象の原因と解釈すれば *let* を用いることを明らかにした。さらに、概念化者が事象の「結果」に焦点を当てる場合には *have* が用いられ、使役の用法は、「結果があればその原因がある」という類推によって用いられていることを示した。このことは、OED の記述から歴史的にもサポートされることを明らかにした。その上で、使役動詞の「棲み分け」がどのようになっているかを図示し、学習者にとって分かりやすい説明をすることが可能となった。

さらに、本研究は、得られた知見を用いて、英語学習者にとってより分かりやすい教授法を考案した。その教授法の効果を確認するため、松商学園高校の2年生及び3年生と、信州大学の1年生に対して新しい教授法を用いて実験を行った。まず、高校2年生と大学1年生に対して予備実験を行い、新しい教授法の実効性について調査を行った。その調査で新しい教授法の効果が期待できることが分かったため、同じ英語レベルを持つ高3年生のグループを2つ用意し、従来の教授法と新しい教授法を比較する実験を行った。実験の結果、新しい教授法を用いて教えたグループの方が、ポストテストに於いて高い伸び率を示した。以上のことから、本研究に基づいて作成された教授法が教育効果の高いものであることが分かった。